

Handwritten cursive script on a horizontal line, featuring a large initial 'L' and a series of connected loops.

Handwritten cursive script on a horizontal line, featuring a large initial 'L' and a series of connected loops.

Handwritten cursive script on a horizontal line, featuring a large initial 'L' and a series of connected loops.

音韻論

母音

シャーリヴーンツは4つの母音を有する。4つの内、a,i,eの3つは短母音と長母音が存在し、uは常に長母音である。

a	a	[a]、[ae]
aa	aa	[aː]、[ɑː]
i	i	[i]
ii	ii	[iː]
u	u	[uː]
e	e	[ɛ]
e	ee	[ɛː]
	r や kh の前に現れる	[ə]

二重母音

ai	ai	下降[ai]
ei	ei	下降[ɛi]
ew	ew (w が[u]となる場合)	下降[ɛu]

子音

シャーリヴーンツは29の子音（一部は二重音字として表記）を有する。

シャーリタム	ラテン転写	音声
b	b	語頭では[b]、語中では[β]になり得る
c	c	[tʃ]
cz	cz	[ts]
d	d	[d]
f	f	[f]
g	g	[g]、異音として[ɣ]
h	h	[h]（母音に接続しない場合 [u]になり得る）
gh	gh	[ħ~ʕ]

j	j	[dʒ]
k	k	[k]
l	l	[l]
m	m	[m]
ym	ym	[ɱ]
n	n	母音に接続する際は[n]、[ɳ] か [ŋ]
p	p	[p]
r	r	[r]
q	q	[ʔ]
kh	kh	[x,x]
s	s	[s]
x	x	[ʃ]
t	t	[t]
v	v	[v]
w	w	[w]（母音に接続しない場合は [u]になり得る）
y	y	[j]か[j]
z	z	[z]

咽頭化・後舌化

咽喉音（gh, q, h）に隣接、あるいは母音を挟んで後続する t,d,s,z,x,l は咽頭化し、/tʰ/,/dʰ/,/sʰ/,/zʰ/,/ʃʰ/,/lʰ/となる。

g,kh,gh,q,h 及びに咽頭化した t,d,s,z,x,l に続く母音 a,i,e は後舌化・中舌化し、/ɑ/,/ɨ/,/ɜ/となる

品詞と語順

品詞

シャーリヴーンツ語における独立した品詞は名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞、関係詞、接続詞、感嘆詞の8つである。

語順

シャーリヴーンツ語の基礎語順は SVO/NA であり、修飾語は被修飾語に後置される。
格接尾辞の存在から、語順の入れ替えは比較的に自由である。

名詞

格

シャーリヴーンツ語の名詞には主格、属格（所有格）、対格（目的格）の3つが存在する。
一般的に与格と言われる様な、他動詞の直接的な対象で無いものは副詞の形を取る。

主格

自動詞文の主語、他動詞文の動作主となる格。

格接尾辞（格語尾）は母音で終わる語の場合は**-ghal**、子音で終わる語の場合は**-al**

例 (jaghal) baajus numailus. 私は広場へ行った。

属格（所有格）

主に所有を表す格であり、先行する語句との所有関係を示す。

格接尾辞は母音で終わる語の場合は**-ghil**、子音で終わる語の場合は**-il**

例 yaida **neghil**. 彼の家

対格（目的格）

他動詞の直接的な対象となる格。

格接尾辞は母音で終わる語の場合は**-lav**、子音で終わる語の場合は**-av**

一つの動詞が自動詞としての用法と他動詞としての用法を併せ持つ場合、対格の有無で区別する。

例 mapeg **yaisalav**. 彼は木を燃やした。

yaisaghal mapeg. 木は燃えた。

代名詞

代名詞は名詞の一部であり、独立した品詞では無い。

人称代名詞

	単数	複数
一人称	ja	jas
二人称	ne	nez
三人称	pa	pez

シャーリヴーンツ語の三人称代名詞には男性・女性の区別は存在しない。

指示代名詞

	単数	複数
近方	at	atas
遠方	al	alas

近方の指示代名詞は手の届く範囲、実際に接触しているもの、会話（文章中）で既出の話題（特に、自分が持ちだしたもの）を示す際に用いる。

例 racaqexes **atav**. 私はこれが食べたい。
racaqexes slaagiilav **atil**. 私はこの魚が食べたい。

遠方の代名詞は手の届かない範囲、相手の近くにある又は相手が触れているもの、そして相手が出した既出話題等を示すのに用いる。

例 getes **alav**. 私はそれが欲しい。
getes kaativelav **alil**. 私はその宝石が欲しい。

遠方の指示代名詞は名詞に定性を付与する際にも用いる

例 khaqecus xeiratav **alil**. 私はその本を読んだ

疑問代名詞

疑問代名詞は疑問文の焦点を示す代名詞であり、形容詞的・副詞的にも用いられる。

基本	人物	場所	時間	選択・様態	数量
nak	naaze	anfa	naj	naix	gena

nak

nak は日本語の「何」に相当する。

例 letatma **nakav**? あなたは何をしているのですか?
nakal baaxma nalav? 何があなたを襲ったのですか?

naaze

naaze は日本語の「誰」に相当する。

例 **naazeghal** kapekma yidaaxalav jaghil? 誰が私のツボを割った?
paghal **naazelav**? 彼は誰ですか?

anfa

anfa は日本語の「何処」に相当する。

例 faipaghal **anfalav**? 此処は何処ですか?
baajama **nuanfa**? あなたは何処へ行くのですか?

naj

naj は日本語の「何時」に相当する。

例 jekama **zunaj** nuat? 彼は何時此処へ来るの?
naix

naix は日本語の「どの・どんな・どの様な」に相当する。

例 caqexutma **naixav**? どんな物・どれを食べたのですか?

caqetutma haijalav **naixil**? どの（どの様な）石を拾ったのですか？
baajutma **zunaix** nuat? どうやって（どの様に）此处まで来ました？

gena

gena は日本語の「いくら、いくつ」に相当する。

例 caqexma **genalav**? 彼はどれぐらい食べましたか？

不定代名詞

不特定の人、物、数、量を表す代名詞。形容詞的/副詞的に扱われることも多い。

不特定	別	全	無・否定	両方
gnas	xak	maam	neik	vat

gnas

日本語の「幾つか、何れか」に相当。

例 naghekus **gnasav**. 私は数人殺した。
naghekus zulav **gnasil**. 私は幾つかの人（数人）殺した。
yabeg **zugnas**. 彼は幾らか歩いた。

xak

日本語の「別の」に相当。

例 getes **xakav**. 別の（物）が欲しい。
rabaajes n` faipa **xakil**. 私は別の場所に行きたい。

maam

日本語の「全ての」に相当。

例 getes **maamav**. 私は全て欲しい。
zulal **maamil** jek numailus. すべての人が広場へ来た。

neik

日本語の否定の「～も」に相当する。

例 caqex **neikav**. 彼は何も食べなかった。

zulal **neikil** baaj numailus. 誰も広場へ行かなかった。

二重否定は強い否定であり、肯定ではない。

vat

日本語の「両方の」に相当。

例 caqex **vatav**. 彼は両方とも食べた。

複数

シャーリヴーンツ語の名詞は無標では単数、あるいは総体を表し、接尾辞-czを用いることによる複数を表す。複数の接尾辞-cz は格接尾辞に先行する。

連続性のある名詞（例 水、空気）等は複数形をとらない。

動名詞

動詞の行為そのものを名詞化するには、「行為名詞」と「naiva 名詞」の二種類がある。

行為名詞は xelve（彫刻）や wekhxe（髭剃り）のように、動詞とは別に行為そのものを名詞とした語である。

例 pakeves xelvelav. 私は彫刻（すること）が好きだ。

しかし、全ての動詞に対して行為名詞が存在する訳では無い。

行為名詞が存在しない場合は名詞 naiva（コトに相当する語）に（抽象・概念的動名詞の場合は）連体形接頭辞 sii + 動詞三人称現在形で表す。

例 pakeves naivalav siikateva. 私は磨くことが好きだ。

動名詞の後に別の語句を付け足し、動名詞句を構成することも可能。

意味上の目的語は無標で、意味上の主語は前置詞 qe を伴う。

意味上の語が置かれる順序は naiva sii 動詞 **qe 意味上の主語 意味上の目的語**

例 pakeves naivalav siikateva kaative. 私は宝石を磨くことが好きだ。

動詞

繋辞

シャーリヴーンツの繋辞 *yil* は他動詞である。

繋辞 *yil* は非過去の場合は省略され、繋げられる名詞は単純に隣接する。

例 *pa mura jaghil* 彼は私の父です

人称変化

シャーリヴーンツ語の動詞は、三人称過去形を原型とする。

非過去の動詞人称変化（例 <i>xalev</i> ）	
一人称	<i>xaleves</i>
二人称	<i>xalevat</i>
三人称	<i>xaleva</i>
過去の人称変化（例 <i>xalev</i> ）	
一人称	<i>xalevus</i>
二人称	<i>xalevut</i>
三人称	<i>xalev</i>

時制/相

シャーリヴーンツ語の時制と相は深く関連している。

非過去は「現在」及びに「未来」を表す時制であり、無標では非完結的に「進行中」、「事実（状態動詞等）」、あるいは「習慣的な継続」を意味する。

副詞（句）等による条件付けを行うことにより、動詞は初めて完結性を獲得する。

条件付けを行ないつつも「進行相（非完結性の付与）」であることを表現する場合は、人称変化接尾辞の後に *-iix* を動詞に接尾させる。

例 *jekes*. 彼は来ている/彼は（習慣的に）来る。

jekes pexuz nuat. 彼は明日此处へ来る。

jekesiix pexuz nuat. 彼は明日此处へ来ている。（道中にいることが確定的である）

過去は無標で「完了」かつ「完結」を意味する。それらを否定する為には未然相、起動相、進行相のいずれかの

相にする。

例 jek nuat. 彼は此処へ来た。

jekiix nuat. 私は此処へ来ていた。(道中にいた)

相表現

相	形式
未然相	動詞に接尾辞-izas
起動相	tahecz + 動名詞
継続・反復相	sages + 動名詞
進行相	無標 or 動詞に-iix(-x)が接尾
終止相	danes + 動名詞

未然相

動詞をまさに行おうとしている相。瞬間的に完結する行為動詞の場合はまだ動作が行われておらず、そうでない場合は動作が未だ完了していないことを表す。

起動相

動詞の開始を表す相。完結性を有する行為動詞の場合は反復の開始を意味する。

継続・反復相

動詞の継続を表す。完結性を有する行為動詞の場合は習慣によらない反復、そうでない非達成動詞（状態動詞等）は状態の継続を表す。

進行相

動詞が終了していないことを表す。完結性を有する瞬間的な行為動詞の場合は習慣的な「反復」を表す。進行相の接尾辞は未然相の接尾辞の後に置かれる。

派生系

動詞の使役形（～させる）、受身形（～される）、そして要求形（～させてください、～してください）は動詞活用により表現する。

派生系	三文字語根	二文字語根 I 形	二文字語根 II 形
基本形	(1)a(2)e(3)	(1)aa(2)	(1)e(2)
使役	(1)aa(2)i(3)	(1)ai(2)	(1)i(2)
受身	(1)e(2)aa(3)	y(1)ee(2)	yi(1)e(2)
要求	(1)i(2)u(3)	k(1)u(2)	ki(1)a(2)

受身は、動作を受ける側（主格）にあわせて人称変化する。

要求形は一人称の場合は「許可要求（～させて下さい）」、二人称の場合は「依頼（～してください）」になる。

助動辞

動詞のヴォイスやモダリティを付与する。打ち消しは常に他の助動辞に先行する。

欲求・希望	ra-	～したい
可能、可能性	ja-	～できる、～かもしれない
許可	kva-	～してもよい
提案・好転・適切、当然	ple-	～したらどうか・～した方がいい、 ～するべきだ
義務、断定	fus-	～しなければならない、～に違 ない
推量	na-	～だろう
命令	a-	～しろ
打ち消し	ku-	～ない
意思、勧誘	-an	～しよう

命令は常に二人称動詞になり、行為者（命令を受ける側）は省略される。

意志勧誘の助同時は進行相 iix に後行する。また、勧誘の場合は常に一人称となる。

否定

シャーリヴーンツにおける否定は、基本的に動詞に打ち消しの助動詞を接頭させることによる「文否定」である。

無・否定の不定代名詞、及びその形容詞形は単独で構成素否定による文を成すことができるが、文否定による方が自然である。

部分否定

部分否定は「不定代名詞 maam（とその形容詞形） + 不定代名詞 neik の副詞形 zuneik により表現する。

疑問文

疑問文は疑問の助動詞 -ma を動詞に接尾させる。

語順の入れ替えは行われない。

形容詞

厳密に言うと、シャーリヴーンツには独立した品詞としての「形容詞」は存在しない。

形容詞として用いられるものは「属格名詞」、「qe 名詞」、「非過去連体形」、「過去連体形」、そして「qe 動詞」の 5 つである。

属格名詞・qe 名詞

被修飾語に属格及びに前置辞 qe が接頭した名詞を後置することで、主に所有を表す形容詞とすることができる。

一般的に、属格による表現は「直接的な所有、関係性が明らかな所属」を表し、qe による表現は「性質、属格ほど直接性のない所属」を表す傾向にあるとされるが、明確な区別は存在しない。

能動連体形

動詞の非過去・過去三人称基本形、あるいは使役形に接頭辞 sii- を接続したものを被修飾語に後置させることにより、「～する/～した」、「～させる/～させた」という形容詞を作ることができる。相動詞を用いたり、相の接頭辞、進行相-iix を用いたりすることも可能。

意味上（擬似）の主語が存在する場合は、連体動詞の後ろに qe- の形で表される

例 zul siicaqexa slaagii 魚を食べる人

zul siicaqexaiix slaagii 魚を食べている人

受動連体形・qe 動詞

受動連体形と qe 動詞は共に三人称の受け身形を用い、その意味に違いがある。

能動連体形と同じ様に sii- を接頭した過去形動詞は「その動詞を実際に受けた」という受動的な意味合いの形容となるのに対し、過去形動詞に qe を接頭させた qe 動詞は「性質」を表す。

例 動詞 haaj は「固める」を意味する他動詞・「固まる」を意味する自動詞であり、

○○ siiyheej で「固められた・固まった○○」となるが、

○○ qeyheej で「硬い○○」という性質を表す形容詞となる。

ここで言う性質とは、「客観的に認められた、ある程度の恒常性を有する特徴」である。

qe 動詞は動詞ごとに固有の意味が定められており、それは動詞の本義と一致するとは限らない。その為、その動詞の qe 動詞としての意味・用法を知らずに qe 動詞として用いることはできない。

例 動詞 jaaj は「重くする、重くなる」を意味する語だが、qe 動詞しては「重い」という意味のみならず、「面倒な、煩わしい」という意味をも有する。

rag/nik

名詞に-rag を接尾すると「○○を有する、○○有る」、-nik を接尾すると「○○を持たない、○○無い」という意味の形容詞にすることができる。

比較・最上級

比較級、最上級は存在しない。
比較には前置詞 map を用いる。

最大性を示すには、副詞 faada を用いる。

数詞

数詞は単独では数（名詞）であり、その他の名詞を修飾する場合（基数詞）に形容詞となる。他の形容詞と異なり、数詞は被修飾語に前置することが可能である。一般的に、数に焦点が置かれている場合は前置、そうでない場合は後置（qe か属格を用いる）する。後置する場合、数詞は全ての形容詞及び属格名詞に後行する。

例 dal czaarizecz qeyheep 二枚の赤い布
czaarizecz qeyheep dalil 二枚の赤い布

序数は数詞 + da で、数助詞は存在しない。

数	読み
0	eku
1	asas
2	dal
3	yalm
4	rat
5	czat
6	tagi

7	nugha
8	peefi
9	alyma
10	alcz
11	alczasas
21	dalalczasas
100	zamul
101	zamul el asas
121	zamul el dalalczasas
1000	fazul
1121	fazul zamul el dalalczasas
10000	czef
12254389	fazul dalzamul el dalalczatzcef el ratfazul yalmzamul el peefalczalyma

シャーリヴーンツにおける副詞は動詞、形容詞、副詞を修飾する。

副詞には主に様態を表す名詞由来副詞、動詞由来副詞、そして主に程度と頻度（確率）を表す純副詞が存在する。多くの名詞は単独では副詞を構成しえず、従属節として副詞句を構成する要素となるが、それらは前置詞・辞が接頭されない。

例 zulal siicaqexaiix slaagii peat ybaagiilav そこで魚を食べている人は旅行者だ。

副詞は原則として被修飾語に後置され、様態を表す場合、「日時、場所、間接目的」の順番で並ぶ。程度と頻度（確率）は文末に置かれることが一般的であるが、動詞に後続させることも可能。

名詞由来副詞・動詞由来副詞（zu 副詞）

名詞や動詞に前置辞や前置詞を付随させることで副詞としての用法を持たせることができる。

日時を表す副詞の様に、「本義的には副詞」である純副詞は名詞由来副詞とならない（前置辞・詞を必要としない）。

例 fusymakhepes pexuz peghaidux nupa ghidaaxalav. 私は明日、鍛冶場で彼に金槌を渡さなくてはならない。

zu 副詞は qe 形容詞と同じく、動詞それぞれに固有の用法が定められている。

例 動詞 maakh は「重ねる」という意味だが、zumaakh は「再び」を意味する

前置詞・前置辞

シャーリヴーンツの一部の前置詞は名詞（一部は動詞）に接頭する。それらの接頭する前置詞を前置辞と呼ぶ。

前置詞	意味
時間に関する前置詞	
pe-	特定の一点（非広域）を指し、「～に、～で」
ev	「～の前に」
em	「～の後に」
fam	広い期間を指し、「～の間」
fav	広い期間を指し、「～中（ちゅう、じゅう）に、～の内に」
jas	一定の連続する時間を指し、「～を超えて、以上」
mees	「（ある期間中）～を通して」
tu-	「～から、～以来」
maafa	「～を通り越して」
puja	「～まで、～までに」
動作の様態（非位置）に関する前置詞	
riz/rizem	「～で、～を用いて」 行為に伴った道具（接触的手段）を示す／「～を用いず」に 行為に指定された道具（接触的手段）が伴わなかったことを示す
zal	「～に関して、～について」
pe-	「～で、～において」
uz	「～に反して」
rani	「～に沿って、～に則って」 例 マニュアル、説明書
favacz	「～の間で」
lu	「～の他に（も）」「～も同様に」
jas	「～を超えて」 例 職権、権限
tu-	「～から、～より」
nu-	動作の直接的な対象ではなく、効果が波及する対象を表す。「～へ、～に、～まで」

baz/bazim	「～と共に、～を伴って」 人物や生物が伴うことを示す / 「～を伴わずに」 後続する人物・生物が伴わなかったことを示す
kiiv	「～を除き」
czine/czinem	「～によって（より）、～を用いて」 動作が後続する人物、生物、手段等により達成されたことを示す。直接的に接触し、作用する道具を用いた場合（ハンマーやドライバー等）は riz、鏡や虫眼鏡等、間接的な手段として用いた場合は czine を用いる
yu/yune	「～の様に」 後続する節と比べたり、例としてあげたり、動作が行われる様が類似していることを示す / 「～の様ではなく」 後続する節と類似していないことを示す
khet	「～から離れて」 例 職務など
mees	「～を通して」
map	「～より～」 主に比較に用いる
qe-	「～の」 所有、属性を表す。
yu-	目的を表す。「～為に」
動作の様態（位置）	
tu-	「～から、～より」
nu-	「～へ、～に、～まで」
pe-	「～で」 開けた場所、敷地全体、概念（学校の建物ではなく、学校という概念）等を示す
afa	「～の上に」 指し示す物体同士が接している
alii	「～の上方に」 指し示す物体同士が接していない
yaali	「～を横切って」
em	「～の後ろに（を）、～の背面に（を）、～の奥に」
nu	「～に対して、～の対面に」
uz	「～の反対に」
rani	「～に沿って、～と並んで」
czug	「～の周りに（を）」
ev	「～の前に（を）、～の全面に（を）、～の手前に」
ayul	「～の下に」 指定されたもの同士が接している
dat	「～の下方に」 指定されたもの同士が接していない

ap	「～の側に、～の横に、～の隣に、～の傍に」
favacz	「～の間に（を）」
jas	「～を越えて」
fav	「～の中に、～の内に、～の内側に」 建物・部屋の内部等を示す
bacz	「～の近くに」
khet	「～から離れて、～の遠くに」
paz	「～に接して」
maafa	「～を通り過ぎて」
mees	「～を通して、～を通し」

関係詞

シャーリヴーンツの関係詞は動詞を修飾する副詞句を導入するためにマーカーとして働く。

時間に関する副詞節関係詞	
lanak	～するや否や。
理由に関する副詞節関係詞	
yjaak	～何故なら～。文頭に来た場合は「～なので」
yakh	～として～。様態にもなり得る。
条件・仮定・範囲・限定に関する副詞節関係詞	
yij	もし～なら。
yijlaa	～する限り～、～するなら。
nakijj	～でないなら。
puja	～まで
akhil	～の（動詞する）限り～。動詞による範囲の限定。
目的に関する副詞的関係節	
yu-	～の為に、～する為に。
yak	～しない為に、～しない様に。
結果に関する副詞的関係節	
yakal	～する程～した（になった）。A yakal B で「B する程に A だった」
etel	～結果～した。A etel B で「B の結果 A した」
譲歩・譲渡・逆説（非順当）に関する副詞的関係節	
kazaal	～にも関わらず、～のに
elijj	～例え～であっても。
vaicze	～する一方で～。
様態に関する副詞節関係詞	
jesik	～の様に。～と。
jesiim	～と異なり～。
map	～よりも

接続詞

接続詞は文、節、句、そして語同士の関係を示す詞である。

el	同じ品詞・形態の語・句を結ぶ。A el B で「A と B」もしくは「A そして B」の意味。
panam	語・句・節同士、あるいは異なる要素同士を結び、A Efna B で「A だけではなく B も」を意味する。
psiik	前後の語・句・節のどちらか一方が対象となる・実現する。「A か B どちらか一方」「A もしくは B」の意味。
ili	前後の語・句・節のどちらか一方、あるいは両方が実現する。「A か B、あるいは両方」の意味。
esej	先行する句・節と後続する句・節が相反し、関係が順当でないことを示す。「A だが B」
yjaak	先行する句・節の結果として後続する詞が導かれることを示す。「A なので B」

enla	並列。前の文と対等な事象としての文であることを示す。「また」
zanav	添付・添加。前の節・文に付け加えることを示す。「そのうえ、更に」
khebag	転換・無視。話題が変わることを示す（前後の文脈が関係無い場合）「ところで」、または前の文脈が無視されたことを示す。「それでも、とにかく」

zuasas	一番目に、最初に。
petehcze	（まず）はじめに、はじめ。
zu〇〇da	〇番目に。
zutel	次に。
elen	（順序的な意味で）そして、そうして。
pedense	最後に、終わりに。

感嘆文

感嘆文は文頭に yunaix を置き、強調したい性質等を文末に置く。

例 yunaix kaativeghal atil qeheejalav! なんてこの宝石は硬いのだろう！